

特集 1 経済学 入門以前

現代日本の台所事情 経済「学」以前

加藤 一郎

**「学」のおめでとう。
「学」のまわりつく
世界へようこそ**

高校生(浪人生)から大「学」生へ。それは生徒から「学」生への変身。「学」という字のまわりつく世界への参入。経済「学」、財政「学」…。高校時代の科目は、国語、社会、理科…。そう、数「学」があった。とすれば数「学」が得意だった人は経済「学」も楽かもしれない。だけど数「学」が苦手だった人は？そんな人のために経済「学」以前の経済の話。

**入学金、アルバイト、
買い物。そしてNPO**

経済というのは人々の暮らしをお金の面からとらえることだ。大学に入学すると入学金、授業料を払う。通学のための定期券を買ったり家賃を払う。車を買った人もいるだろう。毎日の食費…。そのお金はどこから。親、奨学金、アルバイト…。ひとつの家族の経済を家計という。豊かな家計もあればそうでない家計もあるが、家計の基本的な関係は相互扶助だ。

アルバイトで働く。素敵な恋人に出会えるかもしれない。人生の先輩から学べるかも知れない。それはそれとして、時給がいくらかと考える。雇う方はどれだけ役に立つのかと考える。駆け引きの契約の世界だ。これが最も中心的な経済の世界、企業の世界だ。

買い物をする。消費税がかかる。いろいろな税金がある。その税金で国や地方自治体が運営されている。国や自治体はいろんな事を行っている。公共事業、教育、福祉…。この国や自治体の経済を政府の経済といい、家計、企業と並ぶ経済主体だ。この政府の経済の特徴は強制力、権力的なところだ。

経済「学」は経済活動を行う主体をいま述べてきた家計、企業、政府の三つとしている。しかし、実際の経済は「学」を超えて進んでいる。非合法な地下経済は別として、NPO(非営利組織)などによる第四の経済主体が注目を浴びている。

日本経済の大きさは？

問題は？

ともあれ、それぞれの経済主体が行った一年間の経済活動を集めたものが国内

総生産(GDP)だ。日本は500兆円超。アメリカに次ぐ世界第2位だ。経済大国といわれ、困っている国々などへの援助に政府開発援助(ODA)も世界一だ。

しかし、問題も山積みしている。失業率が6%に近づいている。苦しい家計も増えてきた。就職はもちろん良いアルバイトを見つけたのも難しくなった。不景気で苦しんでいる企業も多い。中小企業も大変だが大企業も大変だ。だが、大企業とくに銀行などには「公的資金」が投入されるといふ。「公的資金」は要するに税金だ。苦しい家計や中小企業にすればどうして自分たちにももらえないのかという気持ちになる。

では、大銀行が「公的資金」の受入を喜んでいいのかといえはそうではない。「公的資金」を受け入れると経営責任を追及されたり、国の管理下におかれたりするからだ。

長引く不況はどうして？

**バブル崩壊と
グローバルゼーション**

そもそもこんなに不景気になったのはどうしてか。バブル経済に踊ってしまった



加藤 一郎 (かとう いちろう)

経済学部教授。

1946年生まれ。京都大学大学院経済学研究科博士課程単位取得。京都大学博士(経済学)。1976年高崎経済大学経済学部専任講師。1989年より同教授。財政学、地方財政論を担当。財政学や地方財政論には、誰もが100%納得する答えがない問題が多い。自分なりの答えを、しかもより多くの人たちと共有できる答えを探すことが大事だと思う。そんな人のための手伝いかできたらと思っている。

[URL] <http://www1.tcue.ac.jp/home1/katoi/>

て、値上がり期待で買い集めた土地や株が、バブル経済の崩壊で暴落してしまっただけだ。土地や株を担保に借金したお金が返せなくなり、銀行は返済してもらえなくなったことが原因だ。実はもうひとつ銀行が苦しむ原因がある。

それは経済の運営の仕方を世界的に同じにしよう、端的に言うとなアメリカに見習ってやっていこうということになったことだ。グローバルゼーションといわれるものだ。たとえば、外国でも営業でき

る銀行の場合、貸し出しできるお金は、自分自身のお金(資本金)の12・5倍を越えてはいけないという国際的取り決めができた。8億円の資本金で100億円まで貸せる。

ところがバブルの崩壊で手持ちの株などの値打ちが下がり、資本金が減った。8億円なら100億円貸せたが、資本金が6億円になると75億円しか貸せない。そこで、貸していたお金を回収しようとする。「貸し剥かし」などといわれる事

態が起こる。これでは、お金を借りていた企業は資金不足になりやっつけいけなくなる。そこで「公的資金」を投入して資本金を増やそうという話になる。

厳しい日本の台所事情

しかし、「公的資金」をだす政府の台所が豊かかといえばまったくそうではない。国債や地方債など政府の借金は600兆円、国内総生産をゆうに越えて世界一の借金王国になっている。

要するに、現代日本の台所事情を簡単にいえば、世界でも最大級の大きな台所だが、中にはいると火の車というのが実状だ。火の車だが食べるものがなくなっているわけではない。戦後の高度経済成長やバブル経済の中で知らず知らずのうち身に付いた浪費癖を直せば立派にやっつけいけるはずの台所だ。

食べるってなに?

人間は食べ物がないと生きていけない。しかし、人間は食べるためだけに生きていくのではない。台所に十分な食べ物があることは大切なことだが、台所が十分に大きくなった日本の場合、単に豪華な料理を大量に作るのではなく、そこで暮らす人たちが健康で豊かに暮らしていける質の良い食べ物をつくりだしていくことが必要だ。

新しい日本の台所、新しい日本の経済のあり方は、新入生諸君のような新しい感性の人たちによってつくりだされていくのかもしれない。